



関更の伴風

著者	鈴木 重雅
雑誌名	國文學
巻	8
ページ	56-61
発行年	1952-10-30
URL	http://hdl.handle.net/10112/6387

關更の俳風

鈴木重雅

希因の門に於て学び、一方に翹を唱へた人が二人ある。一は、堀麦水であり、一は、高桑關更である。この二人は、同じく希因に学びながら、前者は年長、後者は年少、同じき師教を承け乍ら、その傾向は、互に背馳するに至つたことは、注目すべきことである。麦水は、希因の師流なる支考、乙由に私淑してはゐたが、やがてその平俗の一体が、芭蕉の本旨に副はぬものなることに想到し、評して曰、

東花坊は、道を僞俗に引下して、大に蕉門を脱き広む、其の功は多し。初め支考なる日は、句々朴实にして、翁の餘韻あれども、終には、三蔵も長木も聞きうけんをこそとやちん云ひて、ひたぶるに俗談卑理損徳の街に落つ。其の頃の全集は、只世話詞の俗本よりいやし、又見るべからず。(蕉門一夜口授)

蕉門に入つた当初は、

馬の耳すばめて寒し梨の花(葛の松原)
食堂に雀鳴くなり夕時雨 (流川集)

しかられて次の間へ出る寒き哉(枯尾花)

の如き句を吐いて居たが、「句々朴实にして翁の余韻あり」といふのは、それであつた。やがて、鍛冶屋の徒弟、店の丁稚にも理解出来るものでなくてはならぬと脱いて、「俗談平話を正す」といふ師教を離れて、俗談平話そのものの中に落ちてしまつた。「俗談平話を正す」とは、是非とも、こゝは、この俗語でなくては、情味が現はれぬといふ場合に、最も妥貼な俗語を、適切に使用するといふことであつて、無暗に、俗語を使用するといふことでは無いのに、矢鱈に、俗語を濫用する傾向に墮して行つた。又、月並調も多くなつた。

其許は涼しさう也峯の松 (そのの花)
やれそこな大根よ蕎麥は花ちりぬ(柿表紙)
時雨ねば松は隙なり小六月 (東西夜話)
新そはや夕べ伊吹を夢にみた (白陀羅尼)
仰けに寝てみれや速し天の川 (麻生)

五月雨に各月ありとしらなんだ (六聯集)
なつからず落柿の秋か恋しいか (百菊)

「世話詞の俗本よりいやし」といふ評は、適切であつた。尤も、俳句の口語調といふのは、芭蕉以前からあつたことで、別に珍しくも無いことであるが、その頃は、唯、滑稽突梯の一段として用ゐられたのであつた。蕉風時代に及んでは、一步を進めて、その内容に妥貼なる場合の外は用ゐぬ様になつてゐたのであるが、僞耳に入り易からんことを求むるの余、その「正す」といふことを度外視して、濫用するやうになつた。俳諧の大衆化には役に立つたかも知れぬが、さうした門人吸収策は、俳諧を俗了せしむることとなつた。この点に於いての麦水の意見は正しい。かくて支考の俗調を脱し、又、淡々の卑野を出でて、虚栗の古風に復帰せんことを志した。即ち、革新の第一歩は、用語の高雅に在りと考へたのであるが、その結果として、漢語、仏語の使用が多くなり、句調が信偏なものとなつた。初期の句風は、

夕顔や物を借り合ふ壁の破れ
出て遊ぶ絵馬の沙汰あり朧月
瘦せたがる妾もありて牡丹かな
といふ風であつたが、

關更の俳風

初雪やさはいへ孤婦の泣くあらむ
よき権や誰ぞ安居せよ茶はこぼむ
さえかへる筈の音いづこ月萬家

といふ様に変化して来た。その内容によつて、信偏調が宜い時は、それも宜からうが、信偏調で、千篇一律にするのも、あまりに極端である。

この傾向を、同門であつた關更は、如何見たかといふに、予が門派に至りては、祖翁に延宝天和の作あるを、我が翁の魂とあやまり、或は漢語を用ひ、大和言葉をかきて、首を巧にし、或は無益の長句を作りて、これを祖翁の洒落と思ひ、又は、五十歩の近走りして風流もなきただ首を吐、似て非なるをまわきまへずといつて、之を排撃した。かくいへば、麦水には、探るべきところは無い様であるが、白雄の攻撃に対して、白雄の芭蕉研究の粗漏なるを咎め、貞享以前、貞享、元禄と、芭蕉の俳風が三度変遷せることを指摘して、元禄の俳風と雖も、必ずしも翁の最後の真骨頭では無いとして、貞享頃を、最も探るべしとして居る。冬の日、曠野、猿蓑などの物色も認めつつ、尙、虚栗を宗として、之を信奉して居る。「虚栗は奇書なり」といつて居るところを見ても、猿蓑の価値を知らぬでは無かつたことは分る。伊勢風、美濃風の横流を阻止せんとした意

氣は、誠に、壯とするに足るものがあつた。が、その聲を矯めんとするの余、種々の欠点をも生じたのであるが、それは、關更が右に指摘してゐる通りである。漢語の点は、已に述べたところであるが、「大和言葉をかきて、言を巧にし」とあるのは、

卜野ゆき紫野行きひばりかな

は、額田女王の歌より、

鴨山の岩根に消えし春の霜か

は、人麿の歌より、

賤の女は引きわづらはぬ葛蒲哉

は、源平盛衰記より、

胸も夜は蟹井にかけれ時鳥

は、源氏物語より、それ／＼得來つたものであるが、古歌集や物語にしか出てこぬ大和言葉といふほどでも無い。

木の端の法師もあつし六月会

白雨や日は奈良坂の片おもて

曾止みね雲霧城の子規

白骨のあなめ／＼や枯すまき

これらの方が、むしろ「言を巧みし」といふ方であらう。全くの口話を用ゐた例も、一方にはある。

あちなもて酒吞家や花柵榴

居るのであるが、奇を捨て凡に就き、險を去り、平に赴くの極は、平板單調に傾くこととなつた。

右の主張を具現した作品は、

元日や松静なる東山

川船や雲雀啼き立つ右左

五月雨や鼠の廻る古葛籠

秋立や店にころびし土人形

枯蘆の日に／＼折れて流れけり

これらは、純然たる客観句で、その間に揺曳する気分、情調は、隱約の間に看取せられ、最も優秀なものに属する。清閑、高雅、和暢、寂寥、爽涼、惨愴の情味は生動して居る。之に主観味の加はつたものでは、

正月も三月過れば人吉し

土に道ふ朝顔は露哀なり

月に啼心はなき歎夕雲雀

陽炎やはかなきと見る人もなし

かやうな主観句になると、殆んど失敗の句ばかりである。几輩の句に、

頁之の舟の灯による千鳥哉

これは、客観句であるが、關更の

頁之のうき旅ゆかし啼ちどり

關更の俳風

「無益の長句を作りて」とあるのは、

花はなし金陵一月の古小袖

水仙やこの花のものと飯袋子

年経るやふるに飽く雪を一掃す

の類で、後体に多い。とにかく、貞享蕉門の模倣を以て事とするに終つたのは惜しいことで、無村等も、逢うた時には、調子を合せたのだが、もはや、一般の人も、之に追隨する時勢ではなかつた。

この傾向に対抗したのは、關更であるが、その主張するところは、「有の儘」に示されて居る。又、落葉考にも、

世に謂風流の一筋は、只物に感じて情を動かし、終に育莢に吐て句となる。是時歌・連俳のもとづく所にして、此間に一毫の私を容ざるを、誠の風雅体とはいふなるべし。

と述べて居る通りである。芭蕉も、一度は、談林の快活には遊んだが、その不自然な俳風に倦いて、之を捨てた。右の自然説からいへば、關更が談林を指して荒唐といつて居るのも、当然である。落葉考には、俳風の變遷も、全く、時代風潮の自然的展開であり、蕉風の興起も、芭蕉一個の私から出たものでないことを説いて居る。その論は、大率、當つて居る。右の俳諧本質論は、所謂「有の儘」といふ題号にも現はれて

となると、あらはな主観的に転じて、淺薄になつて来る。古典的な句も、

黄鳥やひとと啼て籠の内

鋤鉞も今を春辺の田面かな

菊の酒酔て高きに登りけり

位で、平凡な數句をとどむるに過ぎない。古典の教養には豊かで無かつたのであらう。無村などは、その点、天地の差ありと認められる。平明を唱ふる關更としては当然かもしれない。が、平明の極、平板に陥つたものもある。

待甲斐有二羽啼過るほととぎす

土山や唄にもうたふはつしぐれ

雨毎に洪や抜なん柿の色

刈蓋はまことに秋の花なるそ

これらは、砂を噛む底のもので、關更が麦水を評した「風流もなきたゞ言」とは、却つて、自らの句の上に在るものと言ふべきである。これらは、ただ言であるが、更に悪いのは、この句集を通覧すれば分る通り、月並調の多いことである。

月並句の共通した性質の第一は、句調の弛緩して居て、強弓を引きしぼつたやうな緊張味のないことである。これでは、人の琴線に触れることは、むづかしい。句調弛緩の一例は、

「も」の妄用である。

川波やあやふく越る蝶も有
陽炎やはかなきと見る人もなし

同じ「も」でも、

山ふきや花ふくみ行魚もあり

の「も」は、花ふくみ行かぬ魚に対していふのだから、意味はあるのであるが、「蝶も」の「も」は、無意味と思はれる。冗語が入れば、弛緩するのは、当然である。一般に關更の句は、無力に近いものが多く、無村などは、廻屋がある。

花展り鏡落したる坊主哉

雨そぼ／＼花の梢に狼の尻

やまぶきの花の下ゆく芥かな

どれを見ても同様、詩人的の感激に触れることが出来ぬ。

第二は、修辭上からいつて、擬人法の使用である。

目を覚す雉も有らんきじの声

花にまけて花も俯向牡丹かな

きり／＼す振落しけり炭俵

浮羅鳥岩に身をうつ夜もあらん

擬人法は、後の月並者流に濫用せられたが、夢太、白雄、関更にも、その源流が見られる。尙、右の例にも見ゆる如く、疑問体、推量体のものが多いのも、月並の一特徴である。

ながなけとおだまきくる殿杜宇

仰向て啼か水鷗も月の下

はなれじと呼つく声殿閣の照

あれほどにいとしきもの殿天津雁

かく見るは氷らゆうち賊浪の不二

句に、曲折あらしめむ為の手段である。これと同型の手法は、古今集の歌にも見るところである。

第三は、その内容である。単なる敘景句には、よいものもあるが、主観句の中で、理窟めいた、談理風のもの機智的なものが、少しある。

善光寺

よこれたるわれにも法の光りかな

散にけり芥子にのみ吹風も有歟

我がわれをうらやむ去年の時鳥

折尽す鬼もなき世そ野路の梅

元日や此心にて世に居たし

副茶や身をかざるへき事ぞなし

明月や座頭の髪のかこち顔

(一) 六欲煩惱に汚れた身にも、仏陀の慈悲を蒙るといひ、

(二) 無風と覺しきに、散つた芥子を見ては、わざとらしく不審を抱き、(三) 去年、よく聞いた時鳥を、今年は何かぬといふ憾意の不自然な表現、(四) 不風流漢を鬼といふ誇張

法、(五) 俗気のある表現(六) 露骨な教訓、いづれも、月並句そのものであるが、(七)に至つては、月並句の典型的なものである。こんな句が、最も気のきいた句として賞讃を博したものであつた。又、

梅の月消えて窓もる匂ひかな

かうした叙景句も、巧緻なりとして喜ばれた。月並につきものは、陳腐といふ事であるが、この句も「春の夜のやみはあやなし」といふ古今の古歌の変形とも見られる。この外にも、

折て見たり捨たり道の草の花

は、「むしては捨／＼春の草」と同業、

橋の霜離か落してや炭ニツ

は、里人の渡り候か橋の霜と同工。

見るうちに降うしなふや雪の梅

といふが如き誇張も、気のきいた句として迎へられた。

月並句の典型的な例として、いつも挙げられる

冬梅して遠くなる雉かな

朝顔は梅に咲いても強からず

雨乞の霹靂も止みぬ夏の雨

に近い句が、その句集に散見する。

關更が主張する如く、一毫の私を容れぬ観察であつたら、

たゞことに終る位で済むであらうが、小さい主観即ち私を容れてゐるために、遂に月並臭を帯びて来ることとなつたのである。色眼鏡で見た自然が、自然の眞実を得てゐないので同様である。歪曲されて写されるのである。私を容れた主観は、俗意俗情で、それが、俗談平話を媒材として、表現せられ、「俗談平話を正す」といふ態度が忘れられてゐたのであるから、無力な句に終つたのも止むを得ない。蒼虬、梅室共にその門に出て、月並の淵藪となつたのも、当然であつた。

關更の句集中、比較的探るべきものを挙げて見よう。

草うてば釜乱る、舌江哉

かれ／＼や竹の中なる草の憂

日影もる壁に動くや冬の蠅

赤／＼と霜水りけり鬚髮の笠

紅葉散て竹の中なる清閑寺

梅過て菜の花越て金閣寺

鶴の面に川波かかる火影哉

これらは、朗誦に堪ふるものであるが、病牀六尺に、「明和頃に始まつたしまりのある俳句、即ち天明調なるものは、天明と共に終りを告げて、寛政になると關更白雄の如き、半ばしまりて半しまらぬといふやうな寛政調と變つた。これが文

(四一頁下段へ)